

1931-33年のミュルダールとハイエク*

——往復書簡から見る『貨幣理論への貢献』の成立過程——

藤 田 菜々子

I. 問題の所在

一般に、ミュルダールとハイエクは経済学者として論敵関係にあり、彼らの人間関係は良好ではなかったと考えられている。両者はほぼ同じ時代に生き、幾度か交錯して対照的な論陣を張った¹⁾。ミュルダールが生まれたのは1898年であり、その翌年にハイエクが誕生している。1930年代半ば以降、ミュルダールは母国スウェーデンの経済社会システムの変化を背景としながら、福祉国家推進の代表的論者の一人となっていた。それに対し、ナチスドイツの台頭を間近に見たハイエクは、『隷属への道』(初版1944年)以来、福祉国家体制をかなり厳しく批判し続けた²⁾。ミュルダールが亡くなったのは1987年、ハイエクが亡くなったのは1992年である。

福祉国家をめぐって対立的な意見をもつこの二人が1974年の「ノーベル経済学賞」を共同受賞したことは興味深い出来事であった。現在、ミュルダールとハイエクの名が並ぶ場合の大半

* 本研究は科学研究費補助金(19830052)「ミュルダール福祉国家経済思想の研究——1930年代スウェーデンを中心に」の助成を受けたものである。スウェーデン・ストックホルムにある労働運動公文書・図書館(Arbetarrörelsens arkiv och bibliotek, Stockholm: Labour Movement Archives and Library, Stockholm)は、本稿で扱う未公開資料の引用・紹介・翻訳を快く許可して下さった(2011年4月26日許可取得)。ドイツ語の翻訳に際しては、森本慶太氏(大阪大学大学院)に協力していただいた。小峯敦教授(龍谷大学)、楠美佐子氏(名城大学)、吉野裕介氏(京都大学)からは貴重な助言をいただいた。記して感謝する。

1) しかし、両者は直接的に論争したわけではない。ミュルダールのハイエク批判は次のように暗示的であった。「『自由』経済の理想を訴え、つぎに……われわれがどのようにこれらの理想をあとにして前進しつつあるかを指摘しようとし、またそこから論点を進めて、われわれが現在満足している状態を『しのびよる社会主義』と性格づけたり、われわれが『隷属への道』に立っているかもしれないのだと警告を発しようとする人はだれでも、とくに彼があまりにも特殊的にならないかぎり、聴衆の同情を集めることができるのは確かである」(Myrdal 1960, 6-7, 訳12)。ハイエクは、1976年のアメリカにおけるハンフリー上院議員の計画法案提出とレオンチェフ率いる国民経済計画推進委員会の動向を批判したが、後者にミュルダールが含まれていた(Hayek 1976, 訳184; Kresge and Wenar 1994, 147, 訳190-191)。

2) ミュルダールと比較して、ということである。しばしば指摘されるとおり、ハイエクの福祉国家批判は徹底的なものではない。この点については、太子堂(2011)を参照。

は、この受賞に関係するだろう。授賞理由は二人に共通していた。「貨幣ならびに経済変動の理論における先駆的業績、および、経済・社会・制度的現象の相互依存に関する長年の分析に対して」である。確かに、両者とも1930年代半ばまでは貨幣理論の先端的研究で業績をあげており、1940年代以降に制度や社会哲学などへと考察対象を広げたのであって、その知的探究の道筋は似通っていたと見ることができる。とはいえ、ミュルダールの娘シセラ、あるいは、ハイエク側に立つといえるフリードマンも、この共同受賞は左右の政治的イデオロギーのバランスが取られた結果と冷ややかに推測している³⁾。Barber (2008, 164, 訳 262-263) は、経歴の並立性を強調するというノーベル賞選考委員会の巧みなプレスリリースにより、ある程度は両者の潜在的緊張が緩められたと評価した。

本稿の目的は、以上のように論敵関係をほぼ自明視されているミュルダールとハイエクについて、貨幣理論家時代の両者の相互交流や協力関係が確認できる未公開資料の存在と内容を紹介することにある。ミュルダールは、ハイエクが編集した『貨幣理論への貢献 *Beiträge zur Geldtheorie*』(初版1933年)に「貨幣理論の道具としての均衡概念」を寄稿した。この本については、「ノーベル経済学賞」以外の唯一ともいえる両者の直接的接点であるにもかかわらず、ハイエク自身の寄稿がなかったためか、ハイエク研究の側からの評価はほとんどなされてきておらず、ミュルダール研究の側からも言及されることが少ない。また、希少な既存研究においても、当時からすでに両者間には意見対立があったということが強調されている。しかしながら、本稿では、スウェーデン・ストックホルムの労働運動公文書・図書館に残されているミュルダールとハイエクの往復書簡に基づいて、『貨幣理論への貢献』の完成に至る1931年から1933年までの両者の関係を再審に付すことにしたい。

本稿の構成は以下のとおりである。第Ⅱ節では、ハイエク編『貨幣理論への貢献』におけるミュルダールとハイエクの関係について、既存研究による描写を紹介する。第Ⅲ節では、往復書簡の内容を提示する。どのような経緯で執筆陣が確定したのか、ミュルダールとハイエクの間でどのようなやり取りがあったのかを明らかにする。第Ⅳ節は、既存研究による描写に批判的検討を加え、往復書簡に基づく新たな知見と今後の課題について言及する。

3) シセラ・ボクは、そのときの状況をこう描写している。「このように賞を分け合うことは、おそらくグンナー〔ミュルダール〕にとってもハイエクにとっても同程度に冷水を浴びせられたようなものだっただろう。両者は政治的見地からして両極端に位置していた。彼らでもほかの誰でも、授賞はイデオロギー的バランスを取っての結果であると考えないわけにはいかなかった」(Bok 1991, 305,〔 〕内は引用者による)。フリードマンはこう述べた。「ノーベル賞が経済学の分野に設立されたとき、ノーベル財団のルールは、以後5年間はスウェーデン人に賞を授与しないということだった。この年〔1974年〕は6年目だった。彼らはひどくミュルダールに賞を与えたがった。しかし、ミュルダールは政治的に左に位置していたので、ここからは書面的な証拠のない私の推測であるが、彼らは大きな批判にさらされると考え、ミュルダールとハイエク、つまり左と右とを一緒にして、批判を相殺しようと決めたのだ」(Ebenstein 2001, 262-263,〔 〕内は引用者による)。

II. 『貨幣理論への貢献』におけるミュルダールとハイエクに関する既存研究

ハイエク編『貨幣理論への貢献』は、貨幣理論に関する5本の論文を収めた論文集として、1933年にオーストリア・ウィーンにあるユリウス・シュプリングァー出版社からドイツ語で刊行された。論文は所収順に、①マルコ・ファノ「貨幣市場の理論」（初版1912年）、②ゲンナー・ミュルダール「貨幣理論の道具としての均衡概念」、③M. W. ホルトロップ「貨幣の循環速度」、④ヨハン G. クープマン「中立貨幣の問題」、⑤故クヌート・ヴィクセル「北欧諸国の外国為替問題」（初版1925年）であった。

この本、とくにミュルダールとハイエクに関わる事柄については、これまで紹介される機会が少なく、ハイエク研究側においてその傾向がより顕著であったように思われる。例えば、ハイエクの伝記的詳細を含んだ Ebenstein (2001) を調べても、同著についてはまったく言及されていない。

他方、ミュルダール研究ないしストックホルム学派研究の側からは、いくらかの紹介がなされてきた。貨幣理論に関するミュルダールの著『貨幣的均衡』（1939年）に直接的に結びつく論文であり、ある程度は重要性が認知されているからである。ヴィクセルの「不均衡累積過程の理論」に関する内在的批判の論文として、ミュルダールは1931年にスウェーデン語版論文を、1933年にドイツ語版論文を、1939年に英語版（＝『貨幣的均衡』）を発表し、その間、少なからず加筆・削除・修正を加えた。本稿の検討対象であるハイエク編集本所収のミュルダール論文とは、この中途段階の1933年ドイツ語版論文にほかならない。ミュルダール研究の側でしばしば指摘されてきたことは、スウェーデン語からドイツ語への翻訳者マッケンロートの発案により、ドイツ語版論文から新たに「事前 *ex ante*」・「事後 *ex post*」という述語が用いられるようになったということである⁴⁾。

しかしながら、本稿の関心は、そのドイツ語版論文が収められた『貨幣理論への貢献』の形成過程におけるミュルダールとハイエクの関係である。実のところ、その点については既存研究がほとんど存在せず、管見によれば、シェハーディによる「1930年代のLSEとストックホルム学派」論文にほぼ唯一といえる言及を発見できるのみである。そこにおける記述は以下のとおりであった (Shehadi 1991, 382-383, [] 内は引用者による)。

ハイエクとストックホルム学派の話は、オーストリア学派のヴィクセル的伝統に関連している。1930年代、ハイエクはエリック・リンダールの考えに興味をもち、リンダールに彼がドイツ語で編集をしていた本『貨幣理論への貢献』(Hayek 1933)に寄稿するように依頼した。締切に決して間に合わないことで知られたリンダールは、依頼を断り、代わりにミュルダール

4) この改訂過程の検討として、Palander (1953) や平瀬 (2004) を参照。

ルを推挙した。この帰結がミュルダールの有名な論文「貨幣理論の道具としての均衡概念」となった。ハイエクはその論文と政策的結論が気に入らなかったが、儀礼上それを受諾しなければならないと感じており、そのことを不快に思っていた。ハイエクがミュルダールをスウェーデンの外で有名にした論文を出版しなければならないと感じたのは皮肉であった。両者はさほど多くの個人的接触をもたなかったが、ライバル関係は彼らの経歴を通じて続いた。ハイエクは、プリンリー・トーマス⁵⁾が提案したミュルダールのLSE〔ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス〕での講演を許可しなかったことを回顧している。ニコラス・カルドアは、1946年にミュルダールが指揮する欧州経済委員会に参加するために休暇を申し出たが、ハイエクに断られた。そうした関係は、彼らのノーベル賞共同受賞において最高潮に達した。

こうした記述は1930年代のLSE（ハイエクやロビンズ）とケンブリッジ大学（ケインズ）のライバル関係とも関連づけられた。続けて、シェハーディは、ミュルダールをケインズと同列の側に位置づけ、次のように述べた（ibid. 383）。

ハイエクとロビンズの彼らの学生の行動に対する反応は興味深い。……ロビンズはカルドアに対し、学生が混乱するだろうから、ケインズについての講義をしないように求め、彼がそうしないよう確かめるために彼の授業に出席しさえした。ミュルダールは講演するよう招かれたが、来ないようにさせられた。ケインズでさえも、講義室で話をしないようにさせられ、階段近くの大学院コモンルームで話をしなければならなかった。

最近では、こうしたシェハーディの記述を引用や参照指定はしていないもののほとんどそのまま踏襲するかたちで、Barber（2008, 165, 訳264）が次のようにミュルダールとハイエクの関係をまとめている。

少なくとも2回、彼らの間には個人的衝突のようなものがあった。1933年、フォン・ハイエクはミュルダールの貨幣的均衡分析のドイツ語版を彼が編集していた本に掲載して出版したが、彼はそれを渋々そうしたのであった。彼はその議論には根本的に賛成しえないという事実を隠さなかった。ほどなくして、フォン・ハイエク——当時LSEにいた——は、そこでミュルダールが講演するための招待を取り消したと考えられている。ミュルダールの側からは、フォン・ハイエクが『隷属への道』で示した議論にはっきりと距離を置いた。ミュルダール

5) 1934年にスウェーデンに滞在し、ミュルダールとも交流が深かったLSEの経済学者である。LSEにストックホルム学派の経済理論・経済思想を持ち込み、ヒックスやカルドアに影響を与えた。主要業績としてThomas（1936）を参照。

ルが1951年に「経済計画がわれわれを警察国家に直ちに導く、などといった俗受けする話のすべては、もし率直に言うことをお許しいただけるのであれば、戯言にすぎない」と書いたとき、標的に狂いはなかった。

『貨幣理論への貢献』におけるミュルダールとハイエクについて、これらの既存研究から得られる情報は少なくとも3つある。第1に、同著の企画進行過程で、リンダールの代わりにミュルダールが原稿を書くことになったということ。第2に、ハイエクはミュルダールの論文内容に不満があったということ。第3に、ミュルダールはLSEでの講演を依頼されたようであるが、結局LSEを訪れることはなく、その原因としてハイエクの存在、あるいはLSEとケンブリッジ大学とのライバル関係があったということである。

とはいえ、同時に注意が払われるべきは、これらの既存研究では上記3点にかかわる記述内容の根拠となった文献や資料が明示されていないことである。シェハーディによる当該論文 (Shehadi 1991) には、当時LSEにいて直接的にこの問題にかかわったプリンリー・トーマスが「コメント」をつけているが、これらの論点についてはまったく触れられていない (Thomas 1991)。

こうした既存研究の状況に対し、次節ではミュルダールとハイエクの往復書簡の内容を検討する。最終的に、上記の3点は批判され、修正ないし補足的説明が加えられることになろう。結論を先に言えば、第1点目は、正確な情報とはいえず、誤りを含んでいる。第2点目は、往復書簡の内容を見る限り、明確には確認できない。第3点目は、ミュルダールとケインズとの関係性などを含め、今後のさらなる検討が求められることになる。

Ⅲ. 『貨幣理論への貢献』の成立過程

1. 企画立案段階の相互協力

ハイエクからミュルダールへの執筆依頼は1931年8月3日付の書簡に確認できる。これはストックホルムの労働運動公文書・図書館に保管されているハイエクからミュルダール宛の最も古い書簡となっている。当時、ハイエクはオーストリア景気研究所長の職にあり、彼はオーストリアからドイツ語でミュルダールに次のような手紙を書き送った (全文掲載, [] 内は引用者による)。

親愛なるミュルダール教授

私たちがジュネーブで前回会ったとき私におっしゃったように、あなたは現在、貨幣理論の研究に取り組んでおられます。早速ですが、私が少し前から取り組んでいるある計画に参

加されたいかどうか、教えていただければと思います。といいますのも、私はここ数年間の、貨幣理論にとって重要であるけれどもドイツ語でも英語でも出版されていないことから経済学者の多くが手に取れないような論文を発表した執筆者が、ドイツ語で彼らの学説を伝えるような論集を編集したいのです。ウィーンのユリウス・シュプリンガー出版社は、この計画に非常に関心をもっており、各々の寄稿者が『経済学雑誌 *Zeitschrift für Nationalökonomie*』の様式で5・6枚の印刷全紙、つまり100ページ弱の分量を自由に使えるような論集を出版することをすでに基本的に認めました。その際、諸論文は原語で、あなたについて言えばスウェーデン語でも提出可能でして、提出された後にこちらで翻訳されることになります。その場合、出版社が印刷全紙ごとにおよそ100マルクの謝礼を支払い、さらに当然のことながら翻訳の費用を負担することになります。

私は同時に、エリク・リンダール教授、オランダのM.W.ホルトロップ氏と、まもなく「中立貨幣」についてのきわめて興味深く、私も原稿で部分的に知っている研究を公刊するJ.G.クープマン氏、それにパドヴァ〔イタリア北部の都市〕のマルコ・ファノ教授にも協力を依頼します。その際には、彼らが出版に用いる言語が原因となって世界の読者が入手しにくくなっている研究を、少なくともあらゆる重要な新しい知見を得られるように、より長く、しかしかいつまんで発表することが問題となります。自由になる分量は、いずれにせよ、ある雑誌の一つの論文で可能となるような分量よりも、はるかに大きいのです。学問的な専門研究の翻訳を完璧にしようという考えはたいてい困難に直面しますが、この種の論集が学問的な意見交換をずっと容易にし、もっと普及することを期待しています。ちょうどスウェーデン語、オランダ語、それにイタリア語による、これまでもったいないことに普及しなかった多くの貴重な研究が、まさにここ数年のうちに出版されていますので、もしこの試みが成功を取めたなら、将来、例えば資本理論のような他の領域についても、同様の出版が可能となるでしょう。

あなたがこうした作業に協力されて、寄稿論文の中で、あなたの新しい貨幣理論研究のほかにも、もしかしたら「価格形成問題と変動要因」を基にした価格理論上の重要な考えを展開される用意があるのではないかと私はとても期待しています。この計画が最終的に実現するかどうかは、当然のことながら、私が協力を依頼しているほかの諸氏が、同様に了承するかどうかにかかっています。もちろん、彼らが以前に出した出版物の版元と著作権の問題を整理することも寄稿者に頼まなければならないでしょう。

すぐにお返事をいただければ大変ありがたく思います。8月中、手紙は以下の住所へ送ってくださいようお願いします。

ヘルトナーゲル方、インスブルック近郊のアクサム、ティロール

F. A. ハイエク

最後の段落でハイエクが言及している「価格形成問題と変動要因」とは、ミュルダールが1927年に提出した博士論文のことである。そこでミュルダールは指導教官カツセルが『社会経済の理論』（邦題：『社会経済学原論』）で展開したワルラス流の価格形成理論に予想や不確実性といった要素を組み入れようと試みていた。この原稿執筆依頼を受けたミュルダールは、約1カ月後の1931年9月4日、英語で返信した。以下のとおりである（全文掲載、〔 〕内は引用者による）。

親愛なるハイエク博士

8月3日のあなたからの非常に興味深いお手紙に心より感謝いたします。私は読解困難な言語で既刊されているいくつかの論考を編纂するというのは大変によいアイデアであると思います。それに確かなこととして、われわれにはもっと知られるに値するスウェーデン語でのきわめて優れた論考があります。私の研究業績に関していえば、貨幣問題についてはどちらかというところと少なく、さらにいえば、いまある体裁のままでもっと翻訳したいと考えています⁶⁾。実のところ、私は小論を書きたいと思うのですが、まだ書けておらず、またそれはとても限定された範囲の問題を扱うものになりそうです。もし実現するならば、それは「自然利子率」概念そのものについての批判的な議論となるでしょう。

しかし、ここスウェーデンにおけるほかの可能性ある貢献者について提案させてください。あなたはすでに私の友人のリンダールに手紙を送られました。そして、あなたは彼に対して、金融政策の手段と目的についての彼の2冊の価値ある本⁷⁾を要約的に説明することを頼むようにと切に願います。われわれの偉大な先輩ダヴィッド・ダヴィッドソン（ウプサラ大学名誉教授）にも、30年間発展させてきた理論についてまとめることを依頼してはいかがでしょうか。スウェーデン語を読むわれわれ共通の友人、モルゲンシュテルン⁸⁾に尋ねれば、『エコノミスク・ティドスクリスト』⁹⁾に掲載された彼の論文について教えてくれるでしょう。それから、同じ時期のヴィクセルの大変興味深い論文のいくつかをそのまま翻訳するというこ

6) この一文は、ミュルダールの英語能力のためか、文意がつかみにくいものとなっており、後述するハイエクの「誤解」を生み出した一因となったように思われる。原文は次のとおりである。“As to my own writings there is rather little concerning the money problem and furthermore I would like to get them translated more in the form they have.”

7) 直近の2冊と考えれば、Lindahl, E. 1929. *Om förhållandet mellan penningmängd och prisnivå* [『貨幣量と物価の関係について』], Uppsala: A. -B. Lundequistska Bokhandeln. および、Lindahl, E. 1929. *Penningpolitikens mål* [『金融政策の目的』], Malmö: Förlagsaktiebolagets I Malmö Boktryckeri となろう。

8) フォン・ノイマンとともにゲーム理論を構築したことで知られるオスカー・モルゲンシュテルンのことと推察される。後に紹介する1932年8月25日および9月2日付のハイエクからミュルダール宛書簡のなかにも、詳しい説明が加えられることなく彼の名前が書かれている。本稿の注12も参照。

9) 1899年に創刊されたスウェーデンの経済学者向けの学術雑誌である。1965年から *Swedish Journal of Economics*、1976年からは *Scandinavian Journal of Economics* となって、現在に至っている。

とも考えてはどうか。 (彼の息子、ルンド大学のスヴェン・ヴィクセルは、ヴィクセルの論文について書くべき人間です。もしあなたが依頼したくなったら、私にご連絡ください。ヴィクセルやダヴィッドソンにこの件を話して、承諾の意思確認をすることができます。) 最後に、この2人の先輩の論文を当時のまま印刷することも考えられると思います。つまり、ヴィクセルの『利子と物価』〔初版1898年〕に対してダヴィッドソンが1899年の『エコノミスク・ティドスクリフト』誌上で批判的な書評を掲載して以来、彼らの間に続いている議論があります。

興味深い出版に寄稿するよう依頼して下さったあなたのご親切に対して再度感謝申し上げますとともに、この企画がうまくいくことを願います。ところで、いつあなたの新著は刊行される予定なのですか。

敬愛をこめて

この返信において、ミュルダールはハイエクの企画立案を称え、依頼に感謝の意を表しており、速読すると彼は参加の意思を表明したかのように思われる。ところが、後述するとおり、ミュルダール自身は参加の意思表明をしたつもりではなかった。この彼の返答は、ハイエクに「誤解」を生じさせることになった。なお、最後にミュルダールが尋ねているハイエクの新著とは、『価格と生産』のことと推察される。同年9月14日、ミュルダールは短文を送信し、『価格と生産』の出版予定を改めて尋ねている。

このミュルダールからの返信を受け、ハイエクはミュルダールが『貨幣理論への貢献』に寄稿してくれるものと考えた。その結果、彼は1931年9月16日付で、ドイツ語でミュルダールにさらに次のような相談をもちかけた (全文掲載)。

深く尊敬する教授！

本年9月4日付のあなたの親切なお手紙と、計画中の論集に少なくとも小論を寄稿していただけるという好意的な承諾をくださったことに、本当に感謝いたします。依頼したすべての方々から、論集への協力を取り付けましたので、出版の実現はいまや確かなものとなりました。私は、ヴィクセルとダヴィッドソンの研究を掲載したらどうかというあなたの提案に対して感謝するとともに、さらなる助言を求めたく思います。私としては、少なくとも1928年の『エコノミスク・ティドスクリフト』に掲載されたヴィクセルによる貨幣理論についての論文の翻訳を収録しようという考えに、いつのまにかとらわれました。しかし、これに關してはまだいかなる措置も講じておりません。ダヴィッドソン教授の研究にも、私は長らく関心をもっていました。しかし、私のスウェーデン語の知識は、この研究についての知識を得るに十分でなく (『エコノミスク・ティドスクリフト』の該当巻がウィーンで入手できないことはまったく別にしても)、ダヴィッドソン教授がとても近寄りがたく、手紙には返事を出

さないことを私はいろいろな方面から聞いたものですから、彼から論文をもらうことは期待していませんでした。もしあなたが彼を協力させられると信じておられるなら、私は心からあなたに感謝するでしょう。残念ながら、この論集にダヴィッドソンとヴィクセルの間のすべての論争を掲載できるほどの余裕はありませんし、両氏の論文に80ページ以上を割くことはまずできませんので、残念ながら各自の選択した研究の翻訳のみか、あるいはましな場合は、以前の論争を要約した論文の掲載が考えるに値するでしょう。この件に関して私に提案していただき、機会があるようでしたらダヴィッドソン教授とスヴェン・ヴィクセル教授とにお話していただくようお願いします。

われわれは、すべての寄稿論文の原稿が遅くとも2月末までにそろえられればと期待しています。翻訳、そして著者による翻訳の校閲のために必要な時間を鑑みるに、完成版は来年の秋の初めには書店に並べることができるでしょう。

私は、おそらくあなたもお名前くらいはご存じでしょうが、ハレ〔ドイツの都市名〕のマッケンロート博士にスウェーデン語の論文の翻訳を引き受けてもらうように頼むつもりです。この方でご満足かどうかお知らせいただければ、大変ありがたく思います。

あなたの論文の内容については、おそらくこれ以上取り決めることはありませんが、構想中の論文タイトルとおよその分量をお知らせいただければ、大変結構です。ウィーンのユリウス・シュプリングー出版社は、2・3日で出版契約の案文をあなたに送付するでしょう。その案文の内容について、万一連絡される場合は、直接出版社をお願いします。私は今週の終わりにロンドンへ引っ越します。私はロンドンで来学年の間、LSEで客員教授として働くこととなります。そのため、10月から1932年6月までの私への連絡先は、常にLSEの所在地（ホートンストリート、オールドウィッチ、ロンドン、W. C. 2）となります。

『価格と生産』の英語版がおよそ3週間前に出版されました。いくらか増補したドイツ語版は、来週出版する手はずとなっています。あなたへ一冊お送りするつもりです。

私は、私を大いに喜ばせてくれた、計画中の論集に対するあなたの好意的なご協力に対し、もう一度心からお礼を申し上げることで、最大の敬意を表したいと思います。

敬愛をこめて

F. A. ハイエク

この書簡からは、ハイエクがミュルダールの寄稿を当てにしていることが分かる。また、ミュルダールの提案から影響を受けて、ダヴィッドソンと故ヴィクセルの論文を掲載する考えをもつようになったことも読み取れる。

さらに、ハイエクが週末にロンドンに引っ越す予定であることが書かれている。これはハイエクがライオネル・ロビンズの招きにより1931年1月末から2月初旬にLSEで集中講義を行い、好評を得たことによる異動である。彼はLSEでトゥック記念講座教授として働くことに

なり、以後約 20 年間イギリスで生活を送ることになった。

2. 「誤解」の判明

これまでのところ、両者のやり取りは前向きで丁寧なものであり、少なくとも敵対的ではまったくないといえよう。ところが、事態は第 1 の転機を迎える。1931 年 9 月 16 日付のハイエクからの書簡に対し、ミュルダールは 2 つの書簡（1931 年 9 月 26 日付および 10 月 26 日付）を連続して返すことになったが、ハイエクの「誤解」に気づいたミュルダールが自身は寄稿するつもりがないことを明確に伝え直したからである。ミュルダールに執筆依頼をして承諾を得たものと認識していたハイエクは、少なからず動揺しただろう。

1931 年 9 月 26 日付、ミュルダールから LSE のハイエク宛書簡は、英語で書かれており、3 つの内容に対応した 3 つの段落から成り立っている（全文掲載）。

親愛なるハイエク博士

あなたのご著作『価格と生産』の校正刷、そしてケインズの『貨幣論』についてのあなたの重要なお論文¹⁰⁾の抜刷を送ってくださったご親切に心よりお礼申し上げます。後者についてはまだ読み始めたばかりですが、あなたが出される貨幣についてのすべての研究は待ち望まれていたものだという心からの関心をもって読むことになるでしょう。私は、ケインズの本に対するあなたの全般的態度が私とほとんど同じであることについて、大きな喜びをもって気づいたところです。あなたにお伝えし、ちょうど書き上げたばかりの小論では、私はケインズの貢献についてほんの少ししか言及していませんが、そこで私はあなたと同様、彼の理論の根底にある弱点は、彼の表層的な——そして議論の観点からすれば——誤りを含んだ利潤概念にあると述べています。とはいえ、私はそれをリスクと不確実性の観点から批判しているのですが。しかし、この件についてこれ以上は別の機会に。

16 日付のあなたからの興味深いお手紙にも感謝いたします。私はクヌート・ヴィクセルとダヴィッド・ダヴィッドソンという二人の創造的な年輩者を「論集」に組み入れることにあなたが興味をもってくくださったことを大変うれしく思います。私はヴィクセルの最後の論文のみを取り入れるのがよい考えだと思いますが、おそらくその論文に至るまでの彼の思想の発展をまとめた形で数ページ論じるべきだと思います。彼の弟子のエリック・リンダールが彼自身の寄稿とともにそれらのページを書くのがよいだろうと助言いたします。ダヴィッド・ダヴィッドソンについては、彼にあなたの「論集」に向けた新たな論文を書かせるのはまったく可能なことと思われまじ、そこに彼は自分の見解を要約的に述べられるでしょう。あ

10) 出版時期およびケインズ『貨幣論』の利潤概念にかかわる以下の文面の内容を考え合わせるに、Hayek (1931a) と推察される。

なたからの要請に従い、私は今日スヴェン・ヴィクセルとダヴィッド・ダヴィッドソンへ、これまでのことのすべてを伝えるべく手紙を書いているところです。回答を得ましたらご連絡しますし、そのような可能性があるかということについてもご連絡します。あなたからのお手紙を拝見しますと、あなたは私がなすべき貢献を果たすものだろうと考えられた点で私を誤解されたように思われます。実は、私は「自然利子率」についての論文を書いたところでして、同時期に英語で出版できればと考えていますので、当然ながらあなたの論集に掲載していただくということにはなりません。そうなると、確実に重複といった問題が起きるでしょうから。とはいえ、それは論集ではありふれた問題にも思えますが。

あなたはマッケンロート博士についてお尋ねになりました。ええ、私はとてもよく彼を知っており、彼は非常に有能な理論家ですし、彼はちょうど私の本を翻訳したところですから、彼は最も有能な翻訳家であるということができます。

最高の敬愛をこめて

ここで、まず注目されるべきは第1段落のケインズ『貨幣論』の評価に関するところであろう。ミュルダールは自分の意見がハイエクとほぼ同じであると書き送っている。Hayek (1931a, 273-277) は、『貨幣論』における企業家の利潤概念を批判し、「利潤が増加する理由の説明と、彼〔ケインズ〕が定義する『総利潤』の変化のみが産出量の拡大や縮小を導くという推測」には同意できないとした。

第2段落では企画進行における両者の協力関係が観察されるが、後半部において、ミュルダールは自身の返答をハイエクが「誤解」したと書き送っている。しかし、この意思疎通の不良は、ミュルダール側にも責任があったように考えられる。刊行企画への招待に対するミュルダールからの返答（1931年9月4日付、第1段落）は必ずしも明確ではなかった。

最後に話題となっているのは、ミュルダールの『経済学説と政治的要素』である。1930年にスウェーデン語で出版された同著はマッケンロートによって翻訳され、1932年にドイツ語でも刊行された。したがって、ミュルダールは彼のことをよく知っていたのであった。

上の書簡が送られてから1ヶ月経ってもハイエクからの返事はなかったようである。1931年10月26日、ミュルダールは次のように再度書き送った（全文掲載）。

親愛なるハイエク博士

私はまだウプサラ大学のダヴィッド・ダヴィッドソン教授から決定的な回答を得ませんが、クヌート・ヴィクセルの息子、スヴェン・ヴィクセルはとても熱狂しています。ダヴィッドソンからの連絡があり次第、あなたにお手紙をお送りします。あなたの重要な研究『価格と生産』をお送りいただきました大きなご親切に対し、心よりお礼申し上げるばかりです。

敬愛をこめて

ミュルダールからのこれら2通に対するハイエクの返答は、ようやく1931年11月14日付で下記のように確認できる。ドイツ語で書かれた（全文掲載）。

親愛なるミュルダール教授

私は、第一週にこちらでとても忙しくしておりましたので、9月26日付と10月26日付のあなたの好意的なお手紙に返事をしなくてはならなかったのに、いままでなおざりにしてしまいました。もちろん、私の論集にあなたの寄稿を頼りにできないことをまことに残念に思いますし、クヌート・ヴィクセルの研究とダヴィッドソン教授の寄稿論文に関するあなたのご尽力には、率直に感謝しております。私はその件についてさらにお聞きしたくてたまりません。言うまでもなく、すぐに出版社と最終的な取り決めをしなければならないからです。あなたがダヴィッドソン教授をうまく乗り気にさせてくださればよいのですが。

シュプリングー出版社は、あなたが参加することを想定して、出版の構想をすでにあなたに送ったはずですが。私はこの間、出版社にあなたの辞退について知らせましたし、あなたはもしかしたらその構想を、ダヴィッドソン教授に諸条件を知らせるために活用できるかもしれません。

すぐにまたあなたからのお便りをいただきたく思います。

F. A. ハイエク

ハイエクは「誤解」が判明した後も丁寧な態度をほとんど変えなかったといえよう。これに対するミュルダールの返信は1931年11月20日付で次のように確認できる（全文掲載）。

親愛なる教授

14日付のあなたからのお手紙に感謝します。私は今日ちょうどダヴィッドソン教授から返事を得たところです。彼はこれまで私に返事をよこしませんでした。彼は、論集に何か書くという提案に大変興味を覚えるが、そうすぐには用意できないと伝えてきています。私はあなたが直接彼にそのことについて手紙を書くのがよいと思います。基本的な事柄は準備済みです。

スヴェン・ヴィクセル教授からも手紙が届きました。彼は興味をもっており、あなたからの行き届いたご提案のすべてに賛成する心づもりでいます。彼の唯一の条件は、シュプリングー出版社がドイツ語への翻訳権のみをもつということです。

企画全体の準備が整いましたし、あなたがこれらの人々に手紙を送ればうまくいくと思います。

敬愛をこめて

ダヴィッドソンと故ヴィクセルの論文を収録するために、ハイエクとミュルダールは協力を続けたことが確認できる。1931年12月4日、ハイエクはミュルダールに改めて次のように書き送った（手書きの英語、判読不能箇所は省略）。

親愛なるミュルダール教授

11月20日付のあなたからのご親切なお手紙と励ましに大変感謝いたします。私は……約1週間前に、ダヴィッドソン教授とヴィクセル教授に手紙を書き送りましたが、まだ返答を得ていません。

私は最近、オリーン教授が病気……と聞きましたが、それが本当かどうか知りたく思います。もし本当なら私はそれをとても残念に思いますし、彼がもう回復しているとあなたが知らせてくれるのであれば大変うれしく思います。……

近くロンドンに来られる機会はありませんか。……

この書簡の後、両者の間はしばらく音信がなかったようであり、次の書簡は約半年後まで確認できない。その間、ミュルダールが何をしていたのか不明である。しかし、ハイエクの動向は、それに少し先立つ時期から、ある程度知られている。ハイエクは『貨幣論』のケインズと論争を展開していた。それは、公式には『エコノミカ *Economica*』（1931年8月・11月、1932年2月）に確認できるとおりである（Hayek 1931a; 1931b; 1932, Keynes 1931）。また、ケインズとハイエクとは私的に1931年12月10日から1932年2月11日まで6回書簡を往復させた（Keynes 1973, 257-266）。これらはケインズが質問を出し、ハイエクがそれに答えるというかたちであった。

3. ミュルダールの寄稿の決定

1932年5月、『貨幣理論への貢献』の成立過程に第2の転機が訪れた。第1の転機よりも明確なこととして、今度の転機は一方的にミュルダールが引き起こしたといえる。ミュルダールは同年5月25日付で、ハイエクに次のように英語で書き送った（全文掲載、〔 〕内は引用者による）。

親愛なるハイエク博士

昨秋、あなたは私に「論集」へ寄稿できるかどうかお尋ねになりましたが、私はできないと答えました。実は私はヴィクセルの「自然利子率」についての論文に取り組んでいたのですが、その論文は『シカゴ・ジャーナル』に掲載することになっていたのです。しかしながら、その論文は長文になりすぎ、しかもその雑誌に印刷されるにはあまりに詳細な事柄を扱

うものとなってしまったように今では思われます。読者はヴィクセルとその追随者についての比較的込み入った知識を持ち合わせていることを前提とされますが、あなたもよくご存じのとおり、彼らアメリカ人（イギリス人でさえも）の大半はそうした知識をもっていません。あなたもお分かりのように、私はもともと分析の中心的構造物を取り上げるという方法でヴィクセル的系統の思考に対するある程度わかりやすい案内といったものを示したいと考えていました。しかしいまや、この分析はあまりにも複雑になってしまい、私としてはむしろドイツ語で刊行したいと思うようになりました。そういうわけで、私はもともと書くつもりだったサーヴェイを与えるために『シカゴ・ジャーナル』にもう一本別の論文を書かなければなりません¹¹⁾。

こうした状況なのですが、まだあなたの「論集」にはヴィクセル的構造に含まれている貨幣的均衡の理論についてのドイツ語論文を掲載するスペースが残っているかどうかをお尋ねします。その大半はすでにスウェーデンの『エコノミスク・ティドスクリフト』に掲載されていますが、私は『利子と物価』〔ヴィクセル著、初版1898年〕以降のスウェーデンにおける議論、とりわけリンダールの最新かつ重要な貢献について、いくつかの注釈を加えたいと思っています。私の原稿は、およそ35-50ページを必要とすることになるでしょう。翻訳のための原稿は2週間ですべてを準備することが可能な見込みで、マッケンロート博士は7月初めには翻訳を仕上げるができる見込みです。考えていただけないでしょうか。

私があなたにこの手紙を書こうとしていたところ、私の友人のリンダールがストックホルムに到着し、状況の変化のために今夏には原稿を書き上げられそうもないと私に話しました。私はこのことは「論集」の編集者であるあなたにとって大変残念なことと思います。しかし他方で、あなたがリンダールから何も得られないという事実は、別の論文のためのスペースが得られたということを意味します。さらにいえば、私の論文はある程度はリンダールの代わりとなるでしょうが、こうした問題を扱うスウェーデン的方法が自然に現われるやり方といえます。

リンダールは今日にでもあなたに手紙を書き送ると言っていました。できるだけ早く、あなたのご判断を知らせてください。もしスペースをとることができないということでしたら、私はそれをドイツの雑誌に掲載することにしますが、その場合は秋より前にはその仕事に取り組むことはないでしょう。

ところで、老ダヴィッドソンに何か書くように説得することはうまくいきましたか。

敬愛をこめて

11) この『シカゴ・ジャーナル』に掲載されることになったはずの論文の存在は、ミュルダールの業績を整理した Assarsson-Rizzi and Bohrn (1984) において確認できない。ミュルダールが1932年以降の社民党政権下でスウェーデン国内の経済政策・人口政策論議に関与したことを考慮すれば、多忙となったために完成されずに終わった可能性が高い。

随分と唐突な執筆希望の申し入れである。しかも自らの都合で一度は断った依頼であることを考慮に入れば、少々厚かましい申し入れといえるかもしれない。それでも、ハイエクは迅速かつ丁寧にこう返答した（1932年5月26日付、手書き英語、判読不能箇所は省略）。

親愛なるミュルダール様

もちろん、私は本当にあなたの論文を心から歓迎いたします。私はこのことをお伝えするのにとても急いで書いており、……。おそらく、あなたは自分の見解を……延長して論じることができるでしょう。どうなっても、あなたは80ページほどのスペースを使うことができます。……

結局、事態は転回して、ミュルダールは原稿を寄稿することになった。他方、リンダールは寄稿者から離脱することになった。ミュルダールが推挙したダヴィッドソンと故ヴィクセルについては、前者は未決定な態度を見せているものの、後者（スヴェン・ヴィクセル）からは前向きな返答を受けているという状況である。最終的に、ダヴィッドソンは寄稿しなかったが、故ヴィクセル論文は所収されることになった。ミュルダールは、1932年5月末から寄稿原稿の作成に取り組んだと考えられる。

4. 寄稿原稿の完成まで

寄稿が決定してから原稿を完成するまで、ハイエクとミュルダールはさらにはかなりの回数にわたって書簡を往復させた。これ以降の書簡については、筆者の手元にすべてがそろっているわけではなく、欠損箇所や判読不明箇所もかなりある。しかし、文通内容に連続性が確認できる部分について概要を示し、どのようなやり取りがなされたかを手短かに紹介していくことにしよう。

以下では、概要の紹介を基本とし、書簡からそのまま引用・直訳した文章についてのみ、かぎ括弧（「 」）で囲んで表記する。また、書簡の段落に応じて、概要紹介も段落分けする。大まかに言って、以下で紹介する内容は当該期間の書簡内容の7割から8割に相当する。〔 〕内は引用者による補足説明である。全体を確認した後に、説明と検討を加える。

1932年7月18日 ミュルダールからハイエク宛

ドイツ旅行から帰ってきたところである。翻訳者マッケンロートから翻訳原稿のはじめ三分の一が届いた。次の三分の一も数日中に届けられる見通しである。これから読み直した後、出版社に転送する。近日中に再度連絡する。

1932年7月19日 ハイエクからミュルダールとマッケンロート宛（葉書、手書き英語）

「まだ連絡をいただいていない……」という状況確認の短文〔上の書簡とすれ違い〕。

1932年7月27日 ミュルダールからハイエク宛

冒頭から第4章までの原稿（1-94ページ）を郵送する。二三日中には第5・6章（95-186ページ）も送るが、その分はすでにマッケンロートから受け取っている。残り3つの章もマッケンロートが翻訳を仕上げたところで、遅延なく送付できる見通しである。

しかし、文章が長すぎる。マッケンロートは全体が250-300のタイプ打ちページになるだろうと計算しており、印刷ページに換算すると110-140ページとなる。どうしたらよいか、編者ハイエクの意見を聞かせてほしい。

1932年8月25日 ハイエク（ウィーン）からミュルダール宛（葉書、手書き英語）

〔ミュルダールから〕送ってもらった原稿が一時行方不明になったが、ユリウス・シュプリングー出版社の仕事場のミスで、モルゲンシュテルンの *Zeitschrift* 宛の書簡に紛れ込んでいたことが判明した¹²⁾。昨日、モルゲンシュテルンが休暇から帰ってきて発見した。

1932年8月27日 ミュルダールからハイエク（シュプリングー出版社気付）宛

マッケンロートからの手紙を受け取った。彼はハレのタイプライターに187-254頁をひとまとめにして私〔ミュルダール〕に送るよう注文したとのこと。それを受け取り次第、少し修正して送る。受け取ったらすぐに連絡してほしい。

1932年9月2日 ハイエク（ウィーン）からミュルダール宛

8月27日付の手紙を見るに、私が最近出した葉書はあなたにまだ届いていないようだ。繰り返すが、あなたの原稿はシュプリングー出版社の仕事場でモルゲンシュテルンの手紙に紛れ込んだが、見つかった。休暇から帰ってきたシュプリングー出版社の編集者に会い次第、連絡する。

1932年10月25日 ミュルダールからハイエク（シュプリングー出版社気付）宛

論文の校正刷がまだ届かない。郵送システムがまた事故を起こしていないことを祈る。

1932年11月4日 ハイエクからミュルダール宛（葉書、手書きドイツ語）

12) 当時、オスカー・モルゲンシュテルンは『経済学雑誌 *Zeitschrift für Nationalökonomie*』の編者であったことが判明している。この書簡内容と一致することから、ここで述べられているのは、同人であると認定できる。

本〔『経済学説と政治的要素』ドイツ語版〕を送ってくださったことにお礼申し上げます。まずはウィーンに出された問い合わせについて返事するが、これまでのところファノとホルトロップの論文について校正が届いている。これまでの早さからすると、あなたのところへは8日か10日程度で届くのではないか。

『経済学説と政治的要素』について……

1932年11月19日 ハイエクからミュルダール宛（葉書、手書き英語）

いま校正刷の完全版を受け取ったので、あなたのところにも担当分が届いたのではないか。他の寄稿者と同様、論文の冒頭に目次を書き入れる約束をお忘れなく。早く校正刷を返送していただければありがたい。

1932年11月30日 ミュルダールからハイエク（イギリス）宛

11月4日と19日付の手紙に感謝する。拙著〔おそらく『経済学説と政治的要素』〕についてのご意見を興味深く拝読した。あなたともっと詳しく議論したいと思う。「私

がその本を書いた理由は、『価値自由な国民経済学』といった原理が100年以上も存在し、どの教科書にも宣言されているのに、ほとんどの経済理論が規範的イデオロギーをあまりに含んでいるので、古典派の基礎を内在的に分析することが必要だと考えられたからである」。

校正刷の確認を済ませたので、今日マッケンロートに送る。注意深く読んだので、マッケンロートは比較的迅速に作業できるはずで、近日中にあなたの手元にも届くと思われる。

内容目次を作成した。校正刷の最後に書いておいた。

1932年12月13日 ハイエクからミュルダール宛（葉書、手書き英語）

まだマッケンロートから校正済み原稿を受け取っていないが、ほかの論文の修正は仕上げた。もし許してくれるならば、直してもらいたい部分が出てきた。257頁の第7節の始めのところでこう述べられている。「マーシャルだけでなくピグーやホートレーもヴィクセルの論文を読んでいなかったようである」。ピグーは1913年の『エコノミック・ジャーナル』(p. 605)においてヴィクセルの『国民経済学講義』の第1巻を書評した。「この書評は彼がその本を理解した〔下線は原文のまま〕という証拠にはほとんどならないだろうが、彼がそれを読んだという証拠としては認めなければならないと思う」。その文章を修正したいか、その場合はどのようにするか。

1932年12月31日 ハイエクからミュルダール宛（葉書、手書き英語）

12月20日付のあなたからの手紙〔所在不明〕を読み直すと、おそらく誤解が生じたものと思われる。私はスウェーデンの貨幣理論研究の全般的な文献紹介を頼んだつもりではなく、もし

あなたがそれを論文に付加したくないのなら、その必要はない。私が先日の手紙で頼んだのは、そして序文にとって緊急に必要とされていることは、あなた自身の著作についての情報である。

1933年1月12日 ミュルダールからハイエク宛

スヴェン・ヴィクセルに手紙を書いたところだが、あなたに上品な老紳士〔クヌート・ヴィクセル〕の写真を送るよう彼に頼んでおいた。数日中に届くだろう。

私の主要著作のリストを送るが、残念ながらそれらのほとんどは不可解な言語による。よい新年を。

1933年1月16日 ミュルダールからハイエク宛

スヴェン・ヴィクセルから父親〔クヌート・ヴィクセル〕の写真をあなたに送ったという手紙が来た。その写真は彼が70歳頃に撮られたものである。「私も同じ写真を持っているが、とてもきれいだと思う。われわれの老先生の思い出に、あなたがそれを喜んで持っていてくればと思う。私は個人的にはヴィクセルとまったく接触することがなかった。私はカッセルの弟子で、大学院生時代のほとんどを外国で過ごし、その時にヴィクセルは亡くなったのだから、私もあなたと同様、彼の著作物から学ばなければならなくなったが、科学的雰囲気全体が自然とこの偉大な個人の思い出によって満たされている。たとえ彼の講義を聞いたり、彼のセミナーに出席する機会がなかったとしても、われわれはみな彼の弟子である」。

ちょうど原稿の再校に取り組んでいるところである。

1933年1月22日 ハイエクからミュルダール宛（葉書、ドイツ語手書き）

スヴェン・ヴィクセルとの間に立っていただいたことに再度感謝する。クヌート・ヴィクセルの写真が届いたことを喜んでいる。別のお願いをしたい。オリーンが2・3か月前に興味深い本を薦めてくれた。しかし、絶版になっていて、ロンドンの図書館にもない。それはヒルマー・ブロンメル著である（Hilmer Brommel, *Die eigentliche Abschreibung in der dynamischen Bilanz*, Helsingfors, 1923）。

1933年1月30日 ミュルダールからハイエク宛

ストックホルム中でその本〔ブロンメル著〕を探したが、誰も知らず、オリーンでさえも知らない。今日、ヘルシンキへ手紙を書いた。もし入手できたら、あなたに送るよう依頼しておいた。

価格形成理論についての私の昔の本〔おそらく『価格形成問題と変動要因』〕に対し、好意的評価をくださり、大変誇りに思う。いつか改訂し翻訳できればと思っているが、ほかのことが割りこんでくるので、翻訳は何度も延期になってきた。しかし、今秋には取り組むつもりでい

る¹³⁾。

1933年1月31日 ミュルダールからハイエク宛

出版許可証を送る。論文の最後、127頁に一つ注釈を加えてほしい。一週間以内に注釈内容を送る。

1933年2月14日 ミュルダールからハイエク宛

ブロンメル著を入手しようとあらゆる手段を試みてきたが、いまのところまだ入手できていない。しかし、注文は入れてある。

最後に挿入されるべき注釈は次のとおり。

「私はここで、どうにか原稿に目を通すことのできた、まもなくベルリンの Junker und Dünnhaupt から出版される予定の研究を参照するように指示したい。それは、ゲルハルト・マッケンロートの『価格形成の理論的基礎』である。その中で著者は、この場での示唆的な科学哲学の諸問題を詳しく扱っている。こうした諸問題について、彼はいたるところで、同じ結論に至っている。この研究はそれ以上に、著者特有の価格形成理論上の観点で、前の諸章で扱った貨幣理論の問題提起にとっても重要である。」

1933年3月11日 ハイエクからミュルダール宛

あなたにとって間違いなく馴染みのある考えをもつコロンビア大学の B. H. Becknert [手稿のため、一文字読み取り不能] 教授が、スウェーデンへ出発するところで、スウェーデンの経済学者と会いたがっている。旧知の友人として、あなたを紹介できることが大変うれしく、オリーンヤリンダールにもこうした手紙を書く。まちががなく、あなたは彼に会うことに興味をもつと思う。

以上、ミュルダールの寄稿が決定してから原稿が完成するまでに、ミュルダールからハイエクへは10通(言及されているが所在不明分を合わせると11通)、ハイエクからミュルダールは9通の書簡が確認できる。ほとんどが編集者と執筆者という立場における通常の双方向的なやり取りであると見ることができる。しかし、注目すべき内容もいくつか含まれている。

第1に、1932年7月27日付の書簡において、ミュルダールは自身の原稿分量が大きくなりすぎたことを伝えている。このとき彼は印刷ページとして110-140ページとなる見込みであるとした。しかし、事の経緯を遡れば、もともと1931年8月3日に初めてハイエクがミュルダールに刊行企画をもちかけた時、使用できるとしたページ数は100弱であった。さらにいえば、

13) 結局、このミュルダールの博士論文『価格形成問題と変動要因』(1927年)は翻訳されることがなかった。

一旦その依頼を断ったミュルダールが1932年5月25日に改めて執筆の申し入れをした際、彼は自身の原稿分量35-50ページになる見通しであると述べていたのであって、それを受けてハイエクは翌日に80ページまでは確保できると返答していた。ハイエクの言うことはほとんど一貫しているのに対し、ミュルダールの方はかなり変化している。結局、『貨幣理論への貢献』の総ページ数はpp. xi+511、すなわち522ページとなり、そのうちミュルダールの論文は128ページ分のスペースを占めることとなった¹⁴⁾。

第2に、『貨幣理論への貢献』に関する情報のやり取りだけでなく、ミュルダールの『経済学説と政治的要素』についても言及が見られることである(1932年11月4日付、同年11月30日付)。ハイエクは「好意的に」評価したようである。

第3に、1932年12月13日付の書簡では、ミュルダールの原稿に対してハイエクが初めて注文をつけている。これ以外にハイエクが編集者としてミュルダールに尋ね直した部分は、本稿で扱う往復書簡には見当たらない。この「マーシャルだけでなくピグーやホートレーもヴィクセルの論文を読んでいなかったようである」という部分については、わずかな修正が加えられたようであるが、文意はほぼ同じのままに保持された¹⁵⁾。

第4に、クヌート・ヴィクセルに対して、両者ともかなりの尊敬の念や親近感をもって研究を進めていたことが確認できる。スヴェン・ヴィクセルを通じた写真の郵送は象徴的エピソードであり、「われわれはみな彼の弟子である」という言葉は印象的であるといえよう(1933年1月12日付、同年同月16日・22日付)。

第5に、ブロンメル著作の探索やスウェーデンに向かうアメリカ人経済学者の紹介などにおいても、両者の協力的関係ないし「旧知の友人」関係が表れていることである(1933年1月22日付、同年同月30日付、同年2月14日付)。

5. 出版後

ミュルダールが最後に加えるべき注釈の内容について書き送ってから2カ月余り経って、ハイエク編『貨幣理論への貢献』は刊行されたようである。1933年4月30日、ハイエクはミュルダールに刊行の知らせと改めて感謝の意を書き送っている¹⁶⁾。それを受けて同年5月8日にミュルダールはこう返信した(全文掲載、〔 〕内は引用者による)。

14) ファノは114ページ、ホルトロップは96ページ、クープマンは150ページ、故ヴィクセルは20ページであったから、ミュルダールだけ突出して大きなスペースを占めたわけではない。

15) ハイエクが指摘したドイツ語文は“Nicht nur Marshall sondern auch Pigou und Hawtrey scheinen Wicksells Arbeiten nicht gelesen zu haben.”であったが、刊行された文章は“Nicht nur Marshall sondern auch Pigou und Hawtrey scheinen mit Wicksells Arbeiten nicht wirklich vertraut zu sein.”となっている。英語版での当該部分の表現は次のとおりである。“Not only Marshall, but also Pigou and Hawtrey do not seem to be really familiar with Wicksell's work.”(Myrdal 1939, 8).

親愛なるハイエク教授

4月13日〔4月30日の誤りと考えられる〕のお手紙、および、貨幣に関する書物でのあなたの好適な橋渡し役に感謝します。私は増刷と印税を受け取り、出版社にとっても満足しています。（唯一の悲しい点は、彼らが最終的に私の貧相な洗礼名〔Gunnar〕を間違えて、nが2つあるべきところが1つとなっていますし、論文の最初に掲げられている私の名前さえも〔誤ってGunarに〕変えてしまいました。しかし、たいしたことではありません。致し方ないことです。）

私はおそらくこの夏の間は何日かロンドンを訪れるつもりです。あなたはそこに滞在されている予定ですか。

敬愛をこめて

これらに連続する彼らの書簡は2通残されている。1933年5月13日、ハイエクはこう書き送った。「親愛なるミュルダール、ミネソタ大学のマーゲット（A. W. Marget）教授が……自然利子率についての本を完成させたのですが、『貨幣理論への貢献』にあるあなたの論文の抜刷を私からもらえないかと尋ねてきています……」。5月16日、ミュルダールはこう返答した。「親愛なるハイエク、5月13日のお葉書、ありがとうございます。今日、彼〔マーゲット〕に抜刷を発送しておきました。」

これ以降、1930年代の両者間の書簡としてストックホルムの労働運動公文書・図書館に残されているのは、わずか2通にすぎない。1934年5月24日、ミュルダールはハイエクに2冊の論文抜刷¹⁷⁾を受け取ったことにお礼を述べ、こう書いた。「私は大変興味深く拝読しました。われわれは長く議論すべきです。私はいつか個人的にお会いし、議論しあう機会をもてればと思います。手紙では十分に書けません」。1935年6月11日、ミュルダールはハイエクに再びお礼を書き送っている。「親愛なるハイエク、『価格の期待・貨幣的攪乱および不適切な投資』に関するあなたの新しいご論文をお送りくださり、心よりお礼申し上げます。私はそれを夏季休暇に携帯するつもりですが、それを拝読して考えをめぐらすことで多くのことが得られると期待しています」。

16) 藤田 (2010, xv (303)) において、30 September 1933: A letter from Hayek to Myrdal と誤記した書簡に当たる。本稿での4月が正しい。

17) 直近の論文とすれば、Hayek, F. A. 1933. Über "neutrals Geld", *Zeitschrift für Nationalökonomie*, 4, 659-661 および Hayek, F. A. 1934. Capital and Industrial Fluctuation, *Econometrica*, 2, April, 152-167 の抜刷2冊ということになる。

IV. 結 論

スウェーデン・ストックホルムの労働運動公文書・図書館に残されているミュルダールとハイエクの往復書簡を確認することにより、既存研究に対して3つの批判的見解ないし補足的説明を示すことができる。

第1に、Shehadi (1991, 382-383)にあるような「締切に決して間に合わないことで知られたリンダールは、[ハイエクからの]依頼を断り、代わりにミュルダールを推挙した」という記述は、正しくない。ハイエクはリンダールとミュルダールに、同時かつ個別に執筆依頼を出していた。当初、リンダールは依頼を承諾し、ミュルダールは一時「誤解」を生んだものの依頼を断った。状況が逆転したのは1932年5月である。リンダールは「状況の変化」という都合で依頼にこたえられなくなり、他方、ミュルダールはドイツ語圏の読者に向けて論文を書きたいという新たな願望が生じたために、依頼を改めて受けられないかとハイエクに相談した。ミュルダールの寄稿が決定したのは、リンダールが彼を推挙したからではなく、ミュルダール自身の申し入れによってである。リンダールの辞退をミュルダールが埋めたというよりも、むしろミュルダールは当初からハイエクとともに刊行企画を立案・進行させていた。

第2に、ハイエクはミュルダールの論文内容に不満があったという点についてである。再びShehadi (1991, 382-383)によれば、こうであった。「ハイエクはその論文と政策的結論が気に入らなかったが、儀礼上それを受諾しなければならないと感じており、そのことを不快に思っていた。ハイエクがミュルダールをスウェーデンの外で有名にした論文を出版しなければならないと感じたのは皮肉であった。両者はさほど多くの個人的接触をもたなかったが、ライバル関係は彼らの経歴を通じて続いた」。さらにBarber (2008, 165, 訳264)では、「基本的にその議論に賛成していないという事実を率直に伝えた」と書かれている。しかし、往復書簡から見る1931年から33年の両者の関係は、意外なほど親密で、ライバル関係よりもむしろ協力関係の方が目立っており、この記述を裏付ける証拠は見つからない。

とはいえ、ミュルダールの再度の寄稿申し入れには身勝手なところがあったし、既存研究が明らかにしてきたとおり、ミュルダールの理論内容はハイエクのものと相容れない部分があったことも否めないだろう。直接的にやり取りする書簡においては紳士的態度を取り続けたハイエクであるが、内心としてはミュルダールを不快に感じていた可能性はある。実際、ハイエクは自著の中ではミュルダールの貨幣理論に対する批判的態度（しかし賛同も入り混じった複雑な態度）を次のように見せたのであった。「ところでミュルダール教授が私の理論には期待の果たす役割の場がないと文句をつけているが、それにはまったく同意できない。……しかし他方では、彼が景気変動の理論のよりいっそうの発展には期待が非常に重要である、と強調することには完全に同意する」(Hayek 1939, 155, 訳121-122)。

第3に、ハイエクがミュルダールの講演を許可しなかった云々についてである。Shehadi

(1991, 382-383)によると、「ハイエクは、プリンリー・トーマスの提案したミュルダールのLSEでの講演を許可しなかったことを回顧している。ニコラス・カルドアは、1946年にミュルダールが指揮する欧州経済委員会に参加するために休暇を申し出たが、ハイエクに断られた」。

この問題は、上記2点よりも広範な議論を巻き込むだろう。ミュルダールとハイエクはいつから論敵関係になったのか、ということが改めて問われなければならないと考えられるからである。ハイエクの『隷属の道』(1944年)について、確かにミュルダールは批判的であった。しかし、それは1930年代に両者が対立していたことの証明にはならない。さらにここで問われるべきは、ハイエクとケインズの論争が生じている状況で、1931-33年のミュルダールはどういう立場にあったのか、ということになる。

1931年9月26日付のミュルダールからハイエク宛書簡には、ケインズ『貨幣論』に対するミュルダールの感想として次の文章が認められた。「私は、ケインズの本に対するあなたの全般的態度が私とほとんど同じであることについて、大きな喜びをもって気づいたところです。また、ミュルダールは晩年の自伝的著作においても次のように述べている(Myrdal 1982, 170)。

ジョン・メイナード・ケインズの著書である『貨幣論』(1930年)を私はすでにジュネーブで目を通していた。彼はクヌート・ヴィクセルに言及しており、『エコノミック・ジャーナル』においてヴィクセルの『利子と物価』(1898年)を時代遅れの説だと書いた。しかしながら、私にしてみると、彼はヴィクセルの意味するところをあまり理解していないのではないかと思われた。

ミュルダールは、『貨幣論』と『雇用・利子および貨幣の一般理論』(初版1936年)との間にあるケインズの革新をほとんど認めなかった。彼は『一般理論』がストックホルム学派においても関心をもって愛読されたことを認めながらも、こう述べた。「ケインズは、いくつかの特殊な質問においてわれわれを満足させたが、根本的な点のすべてにおいてわれわれの批判的であった。われわれとはとくにリンダールと私自身である」(ibid. 170)。

ミュルダールは1933年のスウェーデン政府予算案付録で積極的財政政策を提言したことから「スウェーデンのケインズ」とも呼ばれることがあるが、彼のケインズ評価は単純ではなく、しばしば批判的ですからある¹⁸⁾。また、ミュルダールはハイエクと一貫して論敵関係にあったと考えられがちであるが、それはおそらく誤りであり、むしろ両者はケインズの『貨幣論』に対してはそれが十分にヴィクセル的思考に立脚していないという共通の批判的見解をもっていた。

1930年代前半におけるケインズとハイエクとミュルダールの三者の関係、あるいは、ヴィクセルとそれら三者の関係は、改めて整理される必要がある¹⁹⁾。この点において、本稿で示した1931-33年における両者の協力関係や意思疎通の内容は意義をもつと考えられる。さらにいえ

ば、ケインズ『一般理論』が刊行された1936年の前と後とでの彼らの理論的・政策論的立場の変化にも注意が払われる必要があるだろう。この問題領域には、ハイエクの指導を受けていたが、そこから離れてミュルダールとケインズの理論的統合へと向かっていったシャックルの存在も浮かび上がってくる(Shackle 1967, 89-128)。ミュルダールに限定して言えば、1933年ドイツ語版論文と1939年英語版著作との間にある変化、ならびに、スウェーデンにおける失業委員会への関与という経験が重要な意味をもつと考えられるが、これらに関しては稿を改めて検討することにした。

参考文献

1. ミュルダールに関する未公開資料

本稿で紹介した往復書簡が含まれているミュルダール関連の未公開資料の所在は、次のとおりである²⁰⁾。Alva och Gunnar Myrdals arkiv (Alva and Gunnar Myrdal's Archive), Arbetarrörelsens arkiv och bibliotek (Labour Movement Archives and Library), Stockholm: Sweden. このうち、ミュルダールとハイエクの往復書簡が所蔵されているボックスの区分番号は次のとおりである。3.2.1 Gunnar Myrdal 1920-1950 [18 volumes] —3.2.1: 5 (1930-1939, H) Hayek, F. A.. 以下、本稿で扱った書簡を時系列に列挙する。

3 August 1931: A letter from Hayek to Myrdal
4 September 1931: A letter from Myrdal to Hayek
14 September 1931: A letter from Myrdal to Hayek
16 September 1931: A letter from Hayek to Myrdal
26 September 1931: A letter from Myrdal to Hayek

26 October 1931: A letter from Myrdal to Hayek
14 November 1931: A letter from Hayek to Myrdal
20 November 1931: A letter from Myrdal to Hayek
4 December 1931: A letter from Hayek to Myrdal
25 May 1932: A letter from Myrdal to Hayek
26 May 1932: A letter from Hayek to Myrdal
18 July 1932: A letter from Myrdal to Hayek
19 July 1932: A letter from Hayek to Myrdal
27 July 1932: A letter from Myrdal to Hayek
25 August 1932: A letter from Hayek to Myrdal
27 August 1932: A letter from Myrdal to Hayek
2 September 1932: A letter from Hayek to Myrdal
25 October 1932: A letter from Myrdal to Hayek
4 November 1932: A letter from Hayek to Myrdal
19 November 1932: A letter from Hayek to Myrdal
30 November 1932: A letter from Myrdal to Hayek
13 December 1932: A letter from Hayek to Myrdal

18) 上述のとおり、ヴィクセルとの比較において、ミュルダールのケインズ(とりわけ『貨幣論』)に対する批判的態度は顕著である。「J. M. ケインズの新しくすばらしい、しかし必ずしも明晰とはいえない研究『貨幣論』には、まったくもってヴィクセルからの影響が行き渡っている。それにもかかわらず、ケインズの研究もまた、魅力的なアングロ・サクソン流の不必要な独創性にいくぶん害されており、それはイギリスの経済学者の大半の側におけるドイツ語圏の知識のある程度体系的な欠陥に端を発しているのである」(Myrdal 1939, 8-9)。また、1970年代にスタグフレーションという問題に直面して、ミュルダールはこう述べた。「次第に経済学として主流になったケインズのアプローチは、あらゆる経済がデフレーションと失業を特徴とする不況に落ち込む傾向を正常と考える明らかに非常に偏ったものであった。ケインズ自身の理論は、彼の本の表題が意味しているような、「一般的なもの」ではけっしてなかった。その点に関しては、ヴィクセルの初期の理論のほうが、理論的にすぐれていた」(Myrdal 1973, 17, 訳20)。

19) ヴィクセルに端を発する貨幣的経済学の展開についての詳細な研究として、平井(1990a, 1990b)を参照。ハイエク・ミュルダール・ケインズが「ヴィクセル・コネクション」に位置づけられている。

20) ハイエク以外の経済学者との往復書簡の情報などを含めた資料の詳細は、藤田(2010, xiii (305))の「参考文献(1. ミュルダールに関する未公開資料)」を参照。

- 31 December 1932: A letter from Hayek to Myrdal
 12 January 1933: A letter from Myrdal to Hayek
 16 January 1933: A letter from Myrdal to Hayek
 22 January 1933: A letter from Hayek to Myrdal
 30 January 1933: A letter from Myrdal to Hayek
 31 January 1933: A letter from Myrdal to Hayek
 14 February 1933: A letter from Myrdal to Hayek
 11 March 1933: A letter from Hayek to Myrdal
 30 April 1933: A letter from Hayek to Myrdal
 8 May 1933: A letter from Myrdal to Hayek
 13 May 1933: A letter from Hayek to Myrdal
 16 May 1933: A letter from Myrdal to Hayek
 24 May 1934: A letter from Myrdal to Hayek
 11 June 1935: A letter from Myrdal to Hayek
2. 欧語文献・邦語文献
- Assarsson-Rizzi, Kerstin. and Harald Bohrn 1984. *Gunnar Myrdal: A Bibliography, 1919-1981*. New York and London: Garland Publishing. (Revised and enlarged edition by Kerstin Assarsson-Rizzi of *Gunnar Myrdal: A Bibliography, 1919-1981* by Harald Bohrn.)
- Barber, William J. 2008. *Gunnar Myrdal: An Intellectual Biography*, New York: Palgrave Macmillan. (『ゲンナー・ミュルダール——ある知識人の生涯』田中秀臣・若田部昌澄監修、藤田菜々子訳、勁草書房、2011年。)
- Bok, Sissela. 1991. *Alva Myrdal: A Daughter's Memoir*. Reading, MA: Addison Wesley Publishing Co.
- Ebenstein, Alan. 2001. *Friedrich Hayek: A Biography*, New York: Palgrave.
- Hayek, Friedrich August. von. 1931a. Reflections on the Pure Theory of Money of Mr. J. M. Keynes, *Economica*, 11 (33), August, 270-295.
- 1931b. The Pure Theory of Money: II. A Rejoinder, *Economica*, 11 (34), November, 398-403.
- 1932. Reflections on the Pure Theory of Money of Mr. J. M. Keynes Part II, *Economica*, 12 (35), February, 22-44.
- 1939. Price Expectations, Monetary Disturbances and Malinvestments, in Hayek, F. A. 1939. *Profits, Interest and Investment: And Other Essays on the Theory of Industrial Fluctuations*, London: Routledge and Kegan Paul. (『価格の期待・貨幣的攪乱・および不適切な投資』『ハイエク全集 2 利潤、利子および投資』加藤寛・林直嗣・細野助博訳、春秋社、1989年。)
- 1976. The New Confusion about Planning, *The Morgan Guaranty Survey*. (『「計画化」にかんする新たな混乱』『ハイエク全集 第Ⅱ期第5巻 経済学論集』古賀勝次郎監訳、小浪充・森田雅憲・楠美佐子訳、春秋社、2009年。)
- Jonung, Lars. (ed.) 1991. *The Stockholm School of Economics Revisited*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Keynes, John Maynard. 1931. The Pure Theory of Money: I. A Reply to Dr. Hayek, *Economica*, 11 (34), November, 387-397.
- 1973. *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol. XIII, The General Theory and After, Part I Preparation*, Edited by Donald Moggridge, Macmillan and St. Martin's Press for the Royal Economic Society.
- Kresge, Stephen. and Leif Wenar (eds.) 1994. *Hayek on Hayek: An Autobiographical Dialogue*. London: Routledge. (『ハイエク、ハイエクを語る』嶋津格訳、名古屋大学出版会、2000年。)
- Myrdal, Gunnar. 1931. Om penningteoretisk jämvikt. En studie över den "normala räntan" i Wicksells penninglära. [Monetary Equilibrium from a Theoretical Point of View. A Study of the "Normal Interest" According to Wicksell's Doctrine of Money.] *Ekonomisk Tidskrift*, 33, 191-302.
- 1933. Der Gleichgewichtsberiff als Instrument der Geldtheoretischen Analyse, translated from Swedish by G. Mackenroth, in F. A. Hayek (ed.) 1933. *Beiträge zur Geldtheorie*, Wien: Julius Springer.
- 1939. *Monetary Equilibrium*, translated from German by R. B. Bryce and N. Stolper, New York: Augustus M. Kelly. (『貨幣的均衡論』傍島省三訳、実業之日本社、1943年。)
- 1960. *Beyond the Welfare State: Economic Planning and Its International Implications*, New Haven & London: Yale University Press. (『福祉国家を越えて——福祉国家での経済計画とその国際的意味関連』北川一雄監訳、ダイヤモンド社、1963年。)

- 1973. *Against the Stream: Critical Essays on Economics*, New York: Pantheon Books. (『反主流の経済学』加藤寛・丸尾直美訳, ダイヤモンド社, 1975年.)
- 1982. *Hur styrs landet? [How Is the Country Governed?]*, Stockholm: Rabén & Sjögren.
- Palander, Tord. 1953. On the Concepts and Methods of the “Stockholm School”: Some Methodological Reflections on Myrdal’s *Monetary Equilibrium*, *International Economic Papers*, 3, 5-57. (Translated from Swedish by R. S. Stedman. The original paper is: Om ‘Stockholmsskolans’ Begrepp och Metoder, *Ekonomisk Tidskrift*, 1, 1941.)
- Royal Academy of Sciences 1974. The Nobel Memorial Prize in Economics 1974: The Official Announcement of the Royal Academy of Sciences, *Swedish Journal of Economics*, 76 (4), 469-471.
- Shackle, George Lenox Sharman. 1967. *The Years of High Theory: Invention and Tradition in Economic Thought 1926-1939*, London: Cambridge University Press.
- Shehadi, Nadim. 1991. The London School of Economics and the Stockholm School in the 1930s, in Jonung 1991.
- Thomas, Brinley. 1936. *Monetary Policy and Crises: A Study of Swedish Experience*, London: George Routledge and Sons.
- 1991. Comments, in Jonung 1991.
- 太子堂正称 2011. 「ハイエクの福祉国家批判と理想的制度論——自由な市場秩序の前提条件」小峯敦編著 2011. 『経済思想のなかの貧困・福祉——近現代の日英における「経世済民」論』ミネルヴァ書房.
- 平井俊顕 1990a. 「ヴァイクセル・コネクション (上) ——貨幣的経済学の軌跡」『上智経済論集』36(1), 16-59.
- 1990b. 『ヴァイクセル・コネクション (下) ——貨幣的経済学の軌跡』『上智経済論集』36(2), 7-71.
- 平瀬友樹 2004. 「ミュルダール『貨幣的均衡』研究」『経済論叢別冊 調査と研究』(京都大学) 28, 56-72.
- 藤田菜々子 2010. 『ミュルダールの経済学——福祉国家から福祉世界へ』NTT 出版.

(2011年5月12日受領)